

て一言する。日本の石器時代介塚の日本鹿を見ると、當時の日本猪と異り、現時の日本鹿より大形であつた證據はあがらず、却つて齒に現はれた大きさに於て現時のと略同様である。即ち當時既に小形となり居つたものと認められる。この事實は予の假説に取つて偶然にも好都合である。更に遡つて羽後國槻木の舊象動物群の日本鹿型は又角のみなので小形であつたとも大形であつたとも判明せぬ。田端の舊象動物群には徳永博士の所屬不詳反芻類があり、是はともすれば日本鹿型に屬するらしく、果して日本鹿型であるならばそれは現時の日本鹿よりも大形である。槻木も田端も予の判断によれば瀬戸内河畔動物群に亞ぐ洪積世古期に屬する。瀬戸内河畔動物にも日本鹿型があり、これも未だ大小が判明して居らぬ。若し予の豫想にして當らば是等洪積世古期の日本鹿型は現時のよりも大形であつた證據のあがる時が来るであらう。然る時にはそれが大陸から侵入したまゝの日本鹿前即ち矮化前の型に相當する譯である。

(松本彦七郎)

●ハンザキ九州に産す

大分縣女子師範學校小澄清氏の報告によれば豊後速見郡上村(八坂川川筋)及豊前宇佐郡院内村(驛館川川筋)にてはハンザキを多數に産し、院内にて捕へたるものは同様に餌育せられ體長七寸五分ありて尙生活せり、之れは

余も實見するを得たり、先年九州巡回の節熊本附近にハンザキ一尾現はれたりとのことなりしが(大島廣氏も熊本附近にて聞きたることありと同氏より通信ありたることあり)、當時は余も大島氏も其産地に就て疑ひたりしが、これにて九州に産するを知るを得たり。

(田中茂穂)

●マツカサウヲの發光に就て

マツカサウヲは、我國にありては日本海及太平洋沿岸の各地より、沖繩方面にも産し、比較的近海に棲む普通なる魚類の一種で、世界各地にも分布廣く、殊に各地の水族館等にも飼養せられて、夙に能く知られたる魚類なるが、其發光に關しては、未だ學界に知られて居なかつた。然るに、大正三年八月十三日、朝來猛烈なる暴風雨あり、午後十時頃に至り、發電所故障の爲、停電の結果魚津水族館内の一時に暗黒となりし際、水槽内にマツカサウヲの發光せるを發見するに至つた。其後引續故障の爲水族館は閉鎖の止むなきに至つた爲、生態等に關し觀察の機會が無かつた。翌年の夏、再び開館に際し、偶々七月に入り材料を得るに至りたれば、當時館内にありてホタルイカの生理現象研究甲の、京都大學生理學教室なる、醫學士正路倫之助氏と共に、親しく觀察の機を得たのである。

該發光機は、下顎の先端に近く、左右に併存せる二個

(雜 錄) ○マツカサウチの發光に就て

の黒色なる、稍橢圓形の疣狀突起で、長徑四耗、短徑三耗、兩發光器間の間隔は約三耗あり、發光器は適合せる窩中にあり、球面の一部は稍突出して居る。

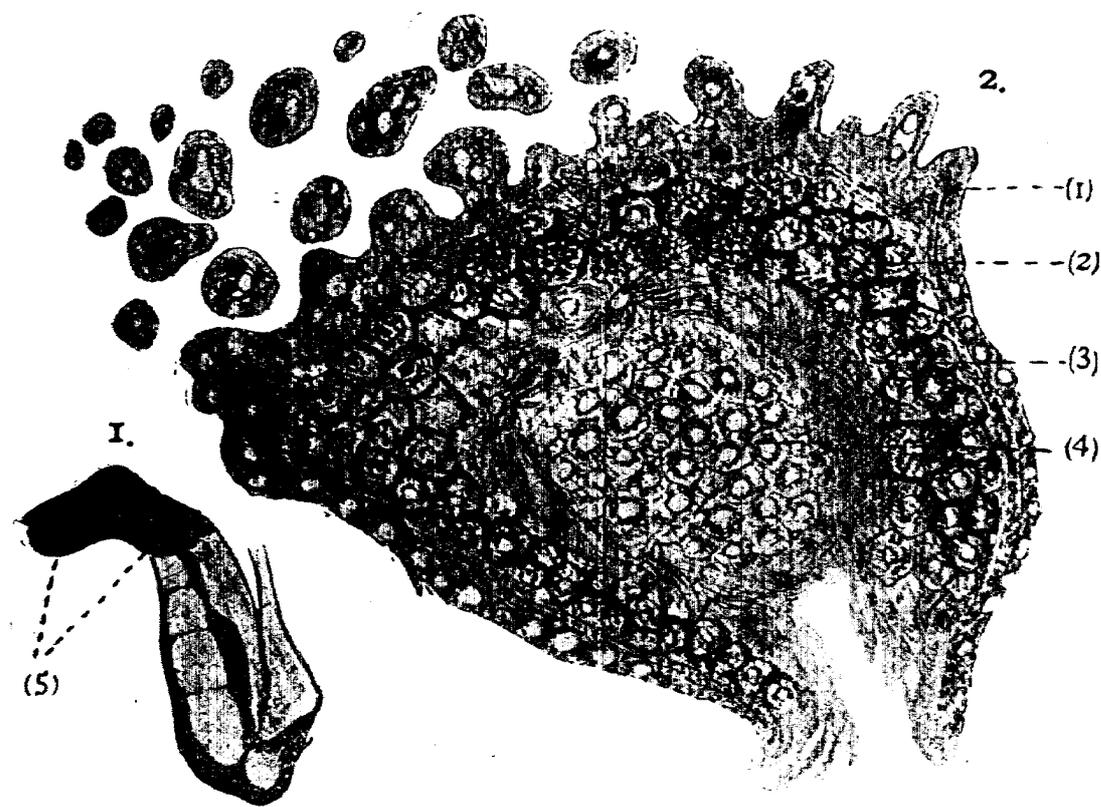
それで、該魚を、試みに玻璃槽に移し、燈火を滅すると、二個の發光器より稍強き綠黄色に近き光を放つ。發光は總て連續的で、間斷明滅する事が無い。

該發光器の外面は、肉眼觀察に於ては、黒色にして絨毛様の突起を有し、比較的鞏固で弾力性に富んだ外層を有し、内部は白色で壞れ易き輕鬆なる質から成つて居る。

今横斷せる切片に就て觀察すると、外層は絨毛狀突起のある上皮と、色素に富んだ色素層(此部分は全形を保持する鞏膜とも見るべきであるまいか)を見る。此層は、光線

マツカサウチの發光器

- (一) 下顎擴大圖。
- (1) 上皮
- (4) 發光細胞。
- (二) 發光器の横斷圖。四十五倍。
- (2) 色素層
- (5) 發光器。
- (3) 結締織層。



の刺戟によりて、其色素をして縮小又は擴散せしむる用をなすにあらずやと考へられる。次に結締織と認むべき層ありて、中央に特種海綿質の様な細胞群を見るは、是れ蓋し發光細胞であらうと思はれる。

此横斷切片に於ては、他動物の發光器に見る reflector の部分が見當らないが、或は結締織層と述べたる中に存するのかも知れない。

以上は單にマツカサウチの發光に關する報告に過ぎないが、發光動物研究の諸學士によりて、他日精細なる研究の世に出ん事を望んで置く。尙本編を草するに當り切片の製作を煩はしたる正路學士、東京農科大學教授石川博士及第五高等學校教授大島理學士等の御懇情も深く感謝する。

(吉澤庄作)